

解体に伴う
緊急調査

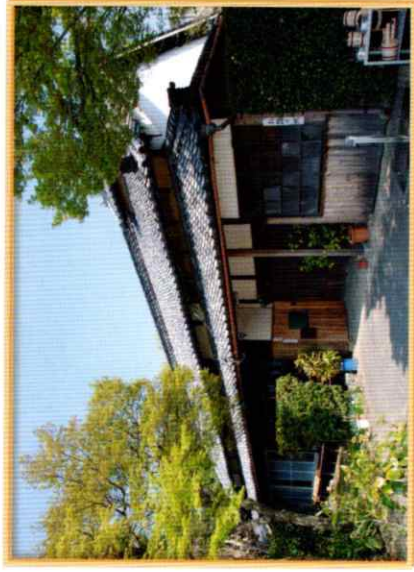
安城市では歴史のある建造物を取り壊される際には出来る限り調査をし、記録を残していくようにしています。

円光寺庫裏（桜井町）

切妻造 棧瓦葺
梁間4間半・桁行12間

円光寺は、真宗大谷派に属し、山号を形谷山といいます。円光寺の伽藍には本堂をはじめ山門、鐘楼、鼓楼などの江戸時代中期から後期に建立された建物が残ります。特に真宗寺院特有の施設である鼓楼は、県内でも十数棟を数えるのみであり、貴重な事例となっています。

今回調査した庫裏は鬼瓦に記された年号から文化6年（1809）に建立されたと考えられます。また、庫裏の解体に際し見つかった表門再建棟札によると、山門も同時期に建立されており、その大工棟梁が当時有名な牛久保（豊川市）の岡田五左衛門（代々襲名・8代目か）であったことから、庫裏も同様に岡田五左衛門によって造られた可能性があります。



▲円光寺庫裏正面

念空寺庫裏（東端町）

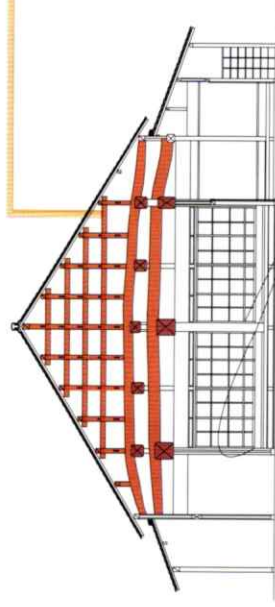
切妻造 棧瓦葺
梁間6間・桁行11間

念空寺は、真宗大谷派に属し、山号を中根山といいます。庫裏は江戸時代末期頃に建立されたと推定される旧庄屋の母屋を移築し、庫裏に改造したものと伝えられています。幕末期における寺院の庫裏と上層農家の建築に大きな隔たりがなかったことをうかがい知ることができます。



▲和小屋架構

土間は天井を張らず小屋組が露出しています。巨大な梁と桁を組み上げて、豪壮な和小屋架構を見せていました。



▲念空寺庫裏断面図



市指定

旧明治郵便局がきれいになりました。

薄紫色に塗られていた外壁を当初の水色で塗り直しました。

内部では、取り払われていたカウンターや電話室の復元をおこないました。

掲載されている建造物は、個人や私的団体の所有物です。
見学の際は、所有者の承諾を得たり、ゴミは持ち帰るなどマナーを守ってお願いします。

安城市歴史的建造物 NEWS Vol.3

平成 22 年 6 月 発行
平成 26 年 3 月 第 2 刷
編集・発行 安城市教育委員会 生涯学習部文化財課文化財係
〒446-0026 安城市安城町城堀 30 番地
TEL (0566) 77-4477 FAX (0566) 77-6600

安城市

歴史的建造物 NEWS

Vol.3



今村公会堂



東尾尾産業倉庫

保福寺本堂

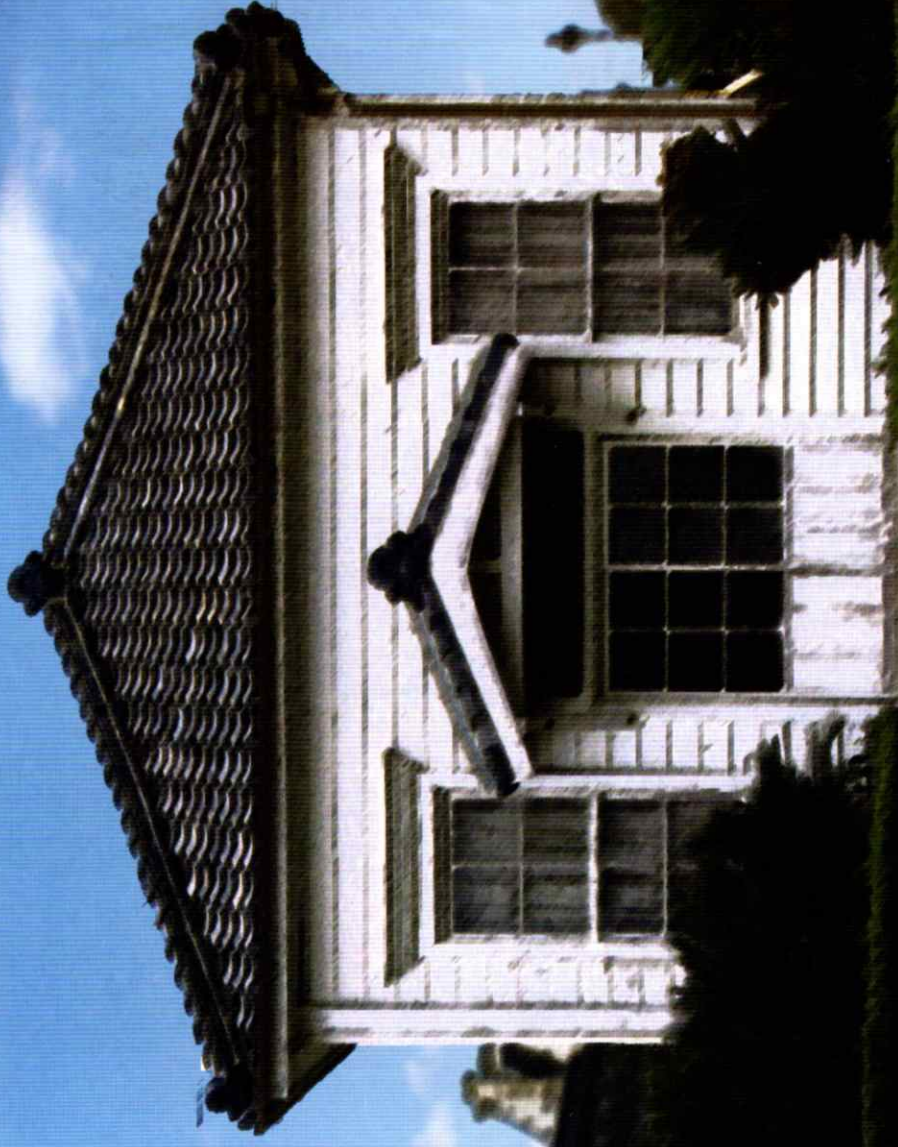
旧東尾産業組合関連施設

今村公会堂

県立安城農林高等学校開校記念館

円光寺庫裏

念空寺庫裏



保福寺本堂 (古井町)

保福寺は曹洞宗に属し、山号を大亀山といいます。寺伝によれば創建は、慶長元年(1596)とも元和元年(1615)ともいわれ、現在の岡崎市明大寺町の龍海院第16世香海智定和尚を開山に招いて建立されたと伝えられています。

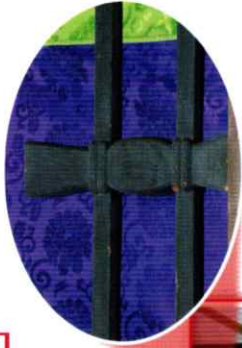
本堂は創建時の建立と伝えられており、同じ禅宗である臨済宗本堂の比較的古い形式の方丈型本堂^{※1}で、細部の様式からも江戸時代初期の建築と推定されます(**point** 参照)。

天保6年(1835)に屋根の葺き替え工事を行ったと伝えられており、また昭和46年(1971)には本堂の大修繕を実施して、後方の開山堂を改築しています。

安城市内に現存する寺院建築としては最古級の建造物です。

point **和様箱仏壇**
須弥壇^{※2}は、彫刻などの装飾がなく簡素な近世初期の箱仏壇が用いられています。

point **竹の節欄間**
竹の節形をした線形の束に横木を通してはめ込んでいます。

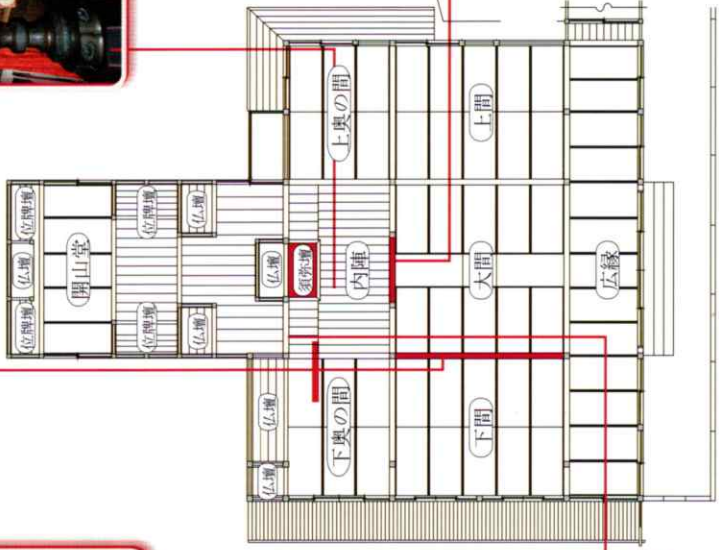


point **虹梁絵様**
虹梁の絵様^{※3}は若葉(写真右側部分)と渦巻(写真左側部分)からなります。若葉の横方向への著しい広がりもなく簡素な絵様です。

虹梁の絵様^{※3}は若葉(写真右側部分)と渦巻(写真左側部分)からなります。若葉の横方向への著しい広がりもなく簡素な絵様です。



保福寺配置図



▲本堂現況平面図

point **菱格子欄間**
剣形の菱格子欄間がはめられています。



◀保福寺本堂正面

本堂は東を正面にして建ち、梁間5間(1間=1.818m)・桁行6間半、寄棟造、棧瓦葺です。

内陣の背面に位置する開山堂は、梁間2間半・桁行4間、切妻造、棧瓦葺です。



創建当時の姿の復元は、現存する部材の当初の状態や改造前の旧態を示す痕跡や仕事の跡を手掛かりに行います。

それらに基づいて復元すると(**point** 参照)、この本堂は方丈六間取りで、下の間・下奥の間の幅は上の間・上奥の間より狭く、その外に入側縁を設ける左右非対称の形態であったことが分かりました。

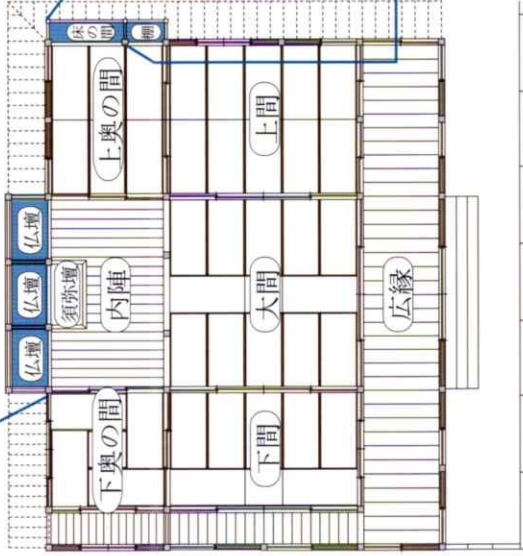
また、開山堂は後に増築されたものであることが明らかになりました。

▼仏壇框を切断した跡



point **横一列に並ぶ仏壇**
独立した来迎柱を用いず、内陣の背面に奥行き半間の仏壇が横一列に並ぶ内陣形態でした。

独立した来迎柱を用いず、内陣の背面に奥行き半間の仏壇が横一列に並ぶ内陣形態でした。



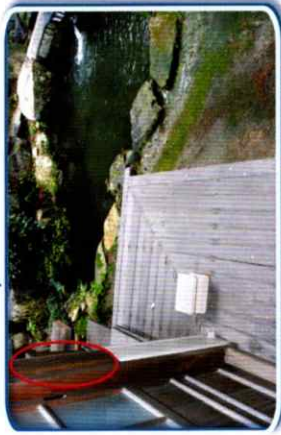
▲本堂復元平面図

point **床の間・棚**
上奥の間は、床の間と棚を備え、外部に庭園をもつ書院としての格式を備えた間でした。

上奥の間は、床の間と棚を備え、外部に庭園をもつ書院としての格式を備えた間でした。



▲旧床柱



▲床の間の壁跡と庭園

※1 方丈型本堂は、内陣とその両側の間と、内陣前室とその両側の間の6間に広縁がつく間取りを基本とします。

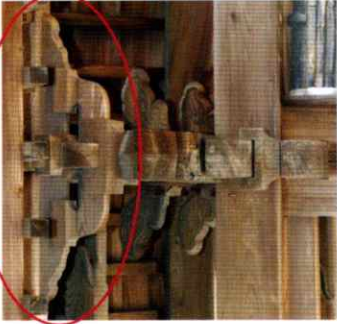
※2 須弥壇は、仏像を安置する壇で、箱形をした和様、中央が細くくびれた形をした唐様などがあります。



▲唐様

※3 虹梁の絵様は、制作された時代によって特徴が変化していくので、社寺の建築年代を決定する手掛かりになります。一般的に、時代が下ると複雑化します。

斗拱



▲山門の斗拱



▲角柱が用いられている

point **その他**
円柱や斗拱は一切使用されていません。斗拱は、おもに柱上にあり、軒を支える仕組みのことで。

円柱や斗拱は一切使用されていません。斗拱は、おもに柱上にあり、軒を支える仕組みのことで。

旧東尾産業組合関連施設（安城町）

産業組合は、農村経済を発展させるため、明治33年（1900）に産業組合法の公布に基づいて組織され、おもに信用事業、生産物の販売、肥料・飼料の購入、脱穀など機械を用いた共同作業などの管理・運営を行いました。

安城市では小川産業組合が大正9年（1920）に設立されたのが始まりです。昭和7年（1932）には26組合を数え、日本デンマーク「安城」を支えました。

東尾産業組合は、大正9年（1920）に設立され、昭和38年（1963）に安城市農協として合併するまで継続しました。

西側を正面とした組合事務所は、道路から少し奥まった所に位置し、その南隣に共同利用工場、共同利用工場の斜向かい、道路をはさんだ南西に農業倉庫が建てられています。

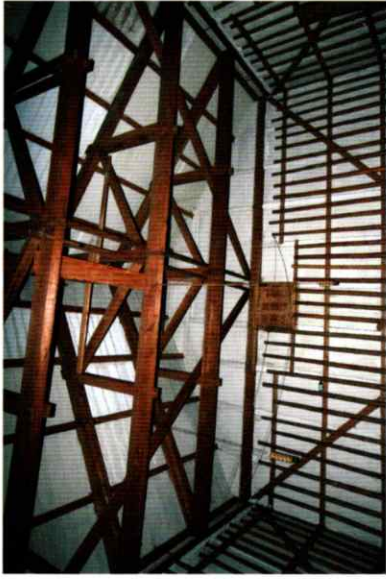
組合事務所、農業倉庫、共同利用工場、すべての建物が現存しているのは安城市で旧東尾産業組合関連施設のみであり、貴重な事例となっています。



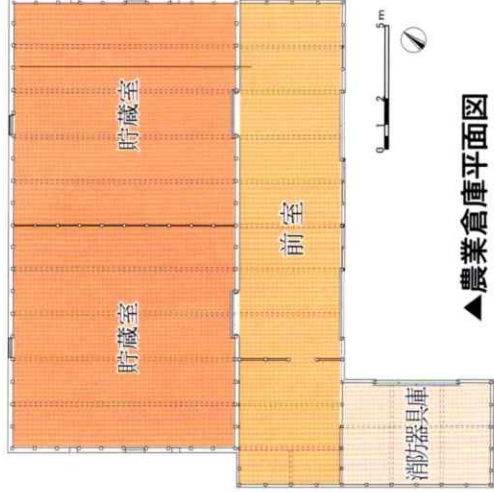
▲農業倉庫正面

農業倉庫は昭和10年（1935）に建造されましたが、昭和20年（1945）の三河地震で損傷したため、昭和27年（1952）に修理を行っています。

東を正面とし、1室が5間×5間の大きさの貯蔵室2室からなる梁間5間・桁行10間の土蔵形式で、倉庫の東側に2間の下屋庇をさしかけた前室があります。また、下屋東南隅には梁間2間半・桁行3間で角屋状に旧消防器具庫が増築されています。



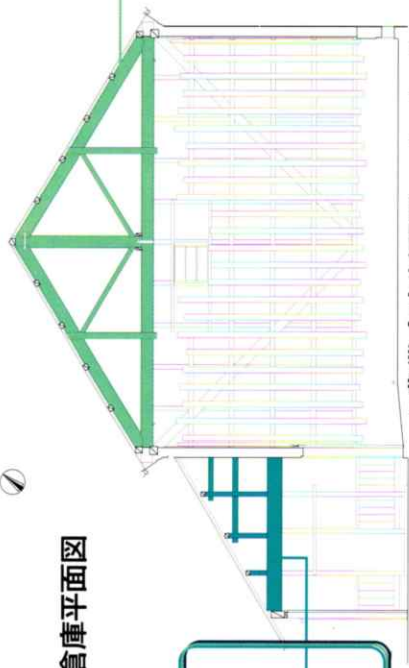
▲南側貯蔵室



▲農業倉庫平面図

和 小 屋

小屋梁に垂直な小屋東を立て屋根を支える構造で、古くから日本の民家に用いられた小屋組です。



▲農業倉庫断面図

トラス（洋小屋）

三角形に組んだ木材で屋根の重さを合理的に支える構造です。これにより、室内に柱のない広い空間をつくることができます。



東尾産業組合関連施設配置図



▲事務所正面
(昭和54年曳き家時:玄関が左側にあります。)

事務所は現在東尾公民館として利用されています。大正13年（1924）の建造当初の事務所は、現存建物の北側部分桁行5間で、後に南側へ2間半増築され、現在の梁間4間・桁行7間半という規模になりました。木造2階建、寄棟造、棧瓦葺の建物です。昭和54年（1979）に道路沿いに建っていた旧状から現在の位置へ東に曳かれ、玄関も現在の位置に移されました。1階は共同利用工場と繋がっています。

西北隅の階段には、ペンキ塗りで框を回した腰壁が残ります。当初内装は、洋風だったことが分かかります。



共同利用工場は、精米麦・脱穀・肥料の粉碎など機械を用いた作業や集荷・荷造りなど共同で行う作業をするための施設です。梁間6間・桁行12間、木造平屋建、切妻造、棧瓦葺の建物で、道路に面した西側を吹き放ちの土間とし、建物内部に床を張って町内会集会所として利用されています。利用工場時代は、全面土間床であったと考えられます。共同利用工場の建造年は不明ですが、構造的に農業倉庫からは少し遅れるものと考えられます。



▲共同利用工場内部



▲共同利用工場外観

今村公会堂（今本町）

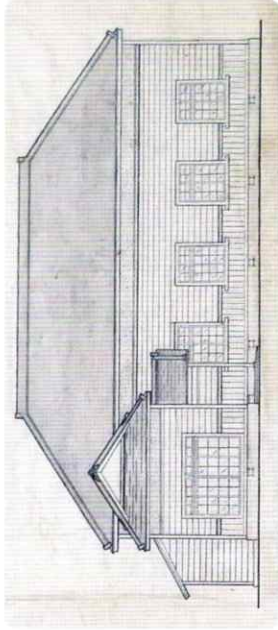
公会堂と名の付く建築は、明治の中頃から建てられるようになり、明治期は政治色が濃く、限定された利用者を対象とした建物でしたが、大正期以降、一般大衆を対象として娯楽や文化・教育の向上を目的に建てられるようになりました。

今村公会堂は昭和4年（1929）に完成しました。公会堂の中心をなすのが、西側に演壇を設けた間口5間・奥行9間の大広間です。当時ここでは、講演会や農産物品評会、青年会の月並講演会、さまざまな娯楽会がおこなわれました。

昭和初期において洋風意匠が大衆建築にどのように取り込まれていたのかを、天井やランプ座、演壇周りに示す貴重な建造物です。

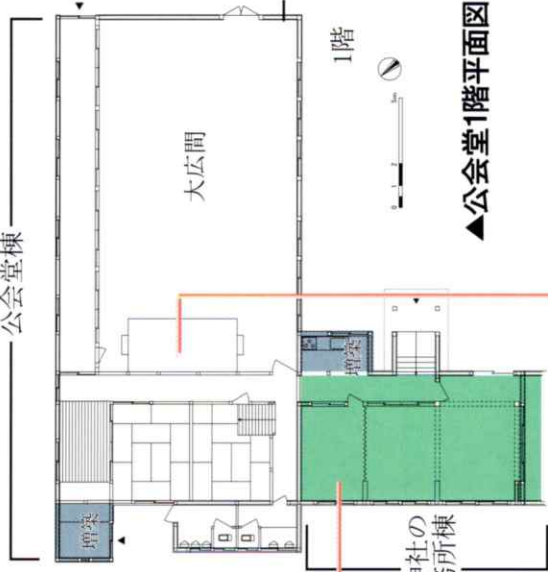


▲大広間（演壇側を臨む）



今村公会堂は梁間6間・桁行12間1尺、寄棟造の公会堂棟（一部2階建て）と梁間3間1尺・桁行6間半、入母屋造の旧社務所棟からなります。

▲建築当時の設計図（南側）

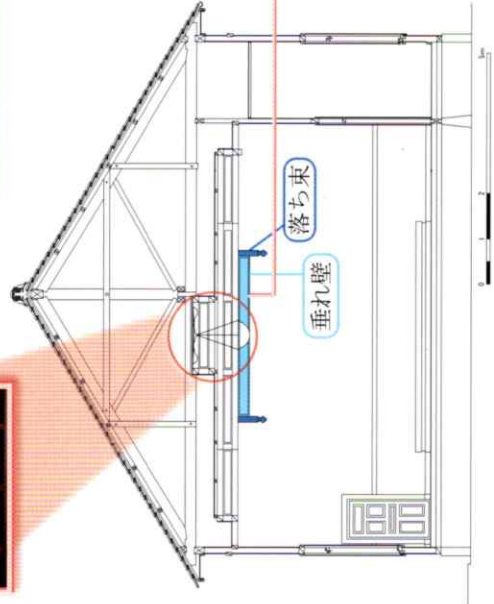


▲公会堂1階平面図

▼吊り照明用の漆喰仕上げのランプ座



▼応接室の洋風天井



▲公会堂（大広間）断面図



演壇上部は、まわり縁より高くなった折り上げ天井で、落ち束と垂れ壁で華やかさを演出しています。（写真は演壇天井を下手から見た様子）

県立安城農林高等学校 開校記念館（池浦町）

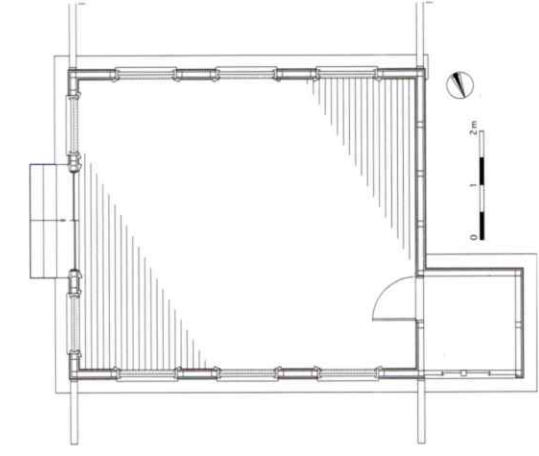
県立安城農林高等学校の前身である愛知県立農林学校は、明治34年（1901）に開校しました。初代校長の山崎延吉は多角形農業を提唱し、「日本デンマーク」を支えた多くの人材を育てあげました。

校地東方に残る開校記念館は、明治36年（1903）の本校舎整備の時に建てられた旧農場監理所です。校地東に隣接して実習地が設けられています。その中央を東西に通る構内道路の西端に面して農場東端の東門までを見通す位置にあります。小規模で簡素な建物ですが、県立学校として旧地に残る建築では県下最古級です。



▲開校記念館正面

東を正面とする間口3間・奥行3間半、寄棟造、棧瓦葺の小規模な建物で、西背面北隅に間口1間・奥行1間の切妻造棧瓦葺の角屋が増築されています。



▲開校記念館平面図



▲内部（奥から出入口をみる）

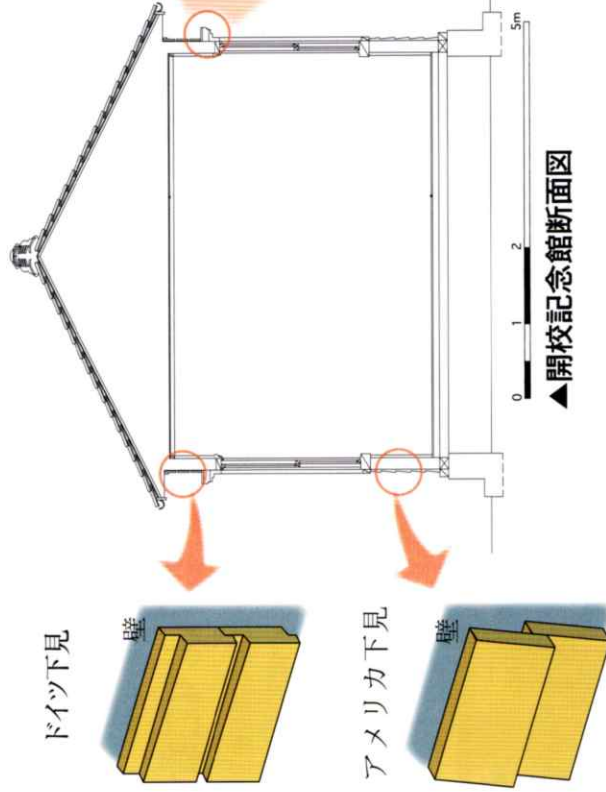


▲開校記念館背面



▲開校記念館北側面

木造建築物の外壁には下見板を、内側に水が入りにくいように少しずつ重ねて張ります。開校記念館では2通りの下見板の張り方が見られます。東・北・南面は、腰から上部がドイツ下見、腰から下はアメリカ下見になっています。西面（背面）は上部6段と角屋の取り付く周囲はドイツ下見、それ以外はアメリカ下見です。アメリカ下見部分は、溝を広げて下見板を差し込んでいる部分もあるため、後補であることがわかります。



▲開校記念館断面図



▲アメリカ下見